

シンポジウム「植物育種の現在・未来と大学の役割」

本シンポジウムは、平成 20 年 3 月 8 日（土）13:00～17:30 まで、東京農業大学図書館 4F 視聴覚ホールにおいて日本農学アカデミーと東京農業大学の共催で行われました。この記録は、当日のご講演等を記録したテープから作成したものです。

なお本記録は、2008 年 10 月に実践総合農学会から刊行されました「食農と環境」第 5 号（出版／東京農業大学出版会）に掲載されましたものを、許可を得て転載したものです。

総合司会 門間 敏幸

（司会） 今日はこの演題にしたがいまして 6 名のパネラーの方に講演をお願いしております。植物育種のそれぞれの分野の達人でありますので、非常に有意義なお話になるのではないかと思います。

それでは、これから開催をさせていただきます。まず初めに日本農学アカデミー会長の鈴木昭憲先生からごあいさつをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

挨拶

日本農学アカデミー会長 鈴木 昭憲

（鈴木） 皆さん、こんにちは。日本農学アカデミーの鈴木でございます。このシンポジウムは、日本農学アカデミーと東京農業大学の共催で開催させていただいています。しかし、その設営と運営につきましては東京農業大学で行っていただきました。

せっかくでございますので、日本農学アカデミーにつきまして、簡単にご説明をさせていただきます。

今から 10 年前、1998 年の年末に有志が集まって、日本農学アカデミーが創立されました。設立のきっかけは、日本学術会議の運営のあり方に対する改革論議にありました。具体的な改革の方向としましては、政府の動きとはある意味で一定の距離を置いて、学者が自由に発言できる場を持つことが必要だという方向になり、専門分野ごとにいろいろなアカデミーを作ろうという動きになりました。一番最初に工学アカデミーが設立されました。

以来、学術会議は、皆さんご存じのようにかなり大きく変わらして、6 つの学問分野別の部会から、人文社会系、生物系、理工系という 3 つの分野にまとめられました。そういう意味で、それぞれの研究者が属しております学協会との関連も、かつての学会ほどは密接ではなくなってしまいました。ある意味、学術会議の動きと現場の研究者、技術者との間に一定の距離が出てきているわけです。

そういう中で日本農学アカデミーは、専門的な分野での業績はもちろんですが、同時に

それぞれの専門分野の各組織で一定の責任があるような仕事をやった経験のある人たち、例えば大学でいいますと学部長や学長経験者、研究所であれば所長や部長経験者、それから学術会議の会員であった方々を集めて組織を構成することになりました。組織結成後、今年でちょうど10年目になりました。

農学アカデミーは、国の政策や所属する機関から、ある意味で中立に発言できる立場にあります。また、一定の専門分野にとらわれて発言する必要もありません。できるだけ広い立場から農学全体について、あるいはその農学が担っている産業分野であります農業全体を眺めて、いろいろ自由な発言をさせていただく、そういう団体としての活動が期待されていると思います。

会員は300人近くおりますが、特定の団体から大きな財政的支援を受けているわけではなく、会員の会費で運営しております。そのため、あまり大きな活動はできません。しかし、農業、農学のために貢献をしたいという志はありますので、もし皆様方の中で、こういった問題が農業・農学の分野であるので農学アカデミーで動いて欲しいという希望がありましたら、ぜひそうした情報を会員に、あるいは事務局にいただければ、私たちも微力ではありますが、努力させていただきたいと思っています。

本日は、植物育種のあり方と大学の役割というテーマで、有益な情報の交換がされますことを、心からお祈りいたしまして、開会のごあいさつとさせていただきます。

(司会) 鈴木先生、どうもありがとうございました。続きまして、東京農業大学長の大澤貫寿先生からごあいさつをいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

挨拶

東京農業大学学長 大澤 貫寿

(大澤) ただいまご紹介にあずかりました、東京農業大学学長の大澤でございます。今日は、東京農業大学としまして、植物育種研究の現状と大学の役割を探るためのシンポジウムを企画させていただきました。

最近、本学の学術フロンティア共同研究でアンデスのペルーに行く機会がございました。ペルーでは、たくさんのジャガイモやトマトの原種や多様な植物が保存されておりました。例えば今のトマトは、100年ぐらいかけた育種によって現在に至っているという話も聞きました。

私は農業が専門ですが、作物育種の重要性を見る機会が多くありました。そうした経験から、今後の農業・農学の発展にとりまして育種の大切さを痛感しております。これからの食の自給問題やバイオマスエネルギー問題を考えた場合、これらはすべて太陽エネルギーを固定化するという植物の力に依存しています。化石燃料依存型から食やエネルギーの

持続的供給を考える植物のグリーンサイエンスの基盤を形成するのが、植物の育種研究だと考えています。

そのため、大学、企業、試験研究機関で一体どのような育種研究が実践されているかを是非知りたいと思いました。そこで、大学としてこれからどのように植物の育種の研究教育を手掛けて、社会の発展に貢献していくべきか、様々な意見を聞きながら考えて行きたいと思っています。本日のシンポジウムは、総合研究所の三輪教授のお力添えもあり、その道の第1線の方々をお迎えして開催することができました。本当に楽しみにしております。

また、本日は日本農学アカデミー会長の鈴木昭憲先生がおみえです。農学アカデミーと一緒にこの問題を議論できるということは、我々にとりまして大変いいチャンスだと思っております。本日のシンポジウムが成功裡に終わることを期待しまして、私のあいさついたします。本日はよろしく願いいたします。

(司会) 大澤先生、どうもありがとうございました。